おせんのうち

完

へ13
3543

へ 13
門 3543
號
卷

叢書五十種之一

にせもの

柘園系孫板

早稲田大學図書館
昭31.10.5 受
藏書

紙屋清三郎

にせものかたり

むかし男ありけり人のもとよ夜ひと夜やとれりけるをり
ゆくりなくひとりの女よけきうしてけりもしさかくいひ
よるへくもあらきりけれも心をかんくるしめける男よめ
りける

おもふともこふともゝのゝいもれぬを思ひあまれる
ゝきりふりけり

のちよきけも人のつまよて子きへもさりとゝ男あ丁ひり
をしてふけゝとゝひふし

いて人をおゝひもろけゝ風ふけをおきつゝらおみ名
をもとそさて
昔をとこありけり人のむすめよゝのひて物いひとさりけ
るよおやのもやう志りてあもせすおりよけれを人をさの
みてひそろよせうそこすとて
うきふのみさろゝの濵よみつゝ不のふとろらきめを
人よ見すらん
ろへりとともきえすれいのおやのとりろくせりけるよ
やおはつろふゝ
むろゝ男ゝのひて女のもとよひと夜やとれりけるよいろ
よゝてろきゝゝりけむ友ふりける男のろくふんいひおこ
せさりける
花よやとろりつといもゝ移り香をさすろよくゝと妹
もうらみゝ
男ろへゝ
きく梅の香をふつろゝみねとれともすきものとのみ
人もいふめり
むろゝ男ふるさとよありとひて法師よふりてものまふひ
よいてさつとてよめりける
うゝろ髪わろゝゝらよむふろりけりひろるいものや

こゝろかるらん

山のをよすみのさかひけるをみて

ゝへりみるとそ山のをのあさゝすみさちとゝれよー

空をとひしき

ほとへてふさゝひくゝんそくゝてあつまのゝさよありけ

るよ道よをむゝしの友よあひけりふるさとよありしをり

の去とゝもゝさりいてけるついてよ

うしろみ君ゝこゝらちよおひとちぬいまをいつくよ

心ひくらん

をとゝとゝへー

くらへこゝふりわけろみのいもゝあらをひきゝへさ

ろゝ心ふらまー

むゝしをとこありけりものよみ手ゝくわさともつさふゝ

らす心をえいとうるをしくてみやひの道このめりけれゝ

すゝさゝちあまりよみよくゝりけれを心くゝしくおも

ひけれとせんゝとふゝりけりとある人のゝとよいきける

み女ともさうしのすきまよりのそきていとみくるしきを

とこゝふうちくりよ日とふつきさらんやうふりふといひ

のゝこゝるもあれをゝこゝるをとこゝそそはつとをいふへゝ

めれふといひきとくゝもありてひさふるよあさみとらふを

ととさへゝねて
そはつともいたゝいをふんしりとてゐれをはりす
る人ふらめや
人〻さゝあきれまあきれてしつまりゝへりてけりむゝし
ひとをゝゝるまけしさましひをふんもさりける
むゝしをとこありけりあまりまいきとかりけれをとき
の人みふあさ寝師とふんいひける
朝寝師ゝひるねこのみてけふまとひとまゝおきて
るねふりをする
とよめるも此をとこのうへをいへるなるへしその妻もき

さをとこまきりていきさふりけれをとこちふけ
きて
秋のよの千夜をひとよふすらへて八千夜しねをや
あく時のあらん
女ゝへし
秋のよのちよを一夜よふせりともおきての後をねふ
さくるへし
昔をんふありけりいろこのみふりけれをみめよきをとこ
のこゝねありけふるをえらひてまくらすゝめんとてさゝ
しありきまけりもきゆきてとある川のそとりまてきまけ

るよそのひさりのをとこともおいさるもひろきもさろき
もいやしきも此女みよとてつとひきよけりそろ中よむく
ひさけたまれりけるもおはろりけりひとりのをとこよめ
りける

我むろり色このむ人をまさもあらしとおもへも水の
上よもありけり

女とれをきくて

水のおもよ影やみゆらんろをつさへ水の中よてもろ
こゑよふく

人をひとゝもおもひさらぬかるへし

昔をとど人のもとよいきてひと日ものろさりしけるよゆ
ふくれろさよふりて雨そふりいてくいとさむろりけれ
もあるしのきぬをろりておのろきぬの下よろさねてきよ
けりろくてろへるさよ女ろりとふらひけるよおろちよ
ひきとめてけれも夜ひと夜やとれりけりつとめてその
きぬをろのあるしのもとへろへしつろもすとて

ゆくりふく花の香ふれし袖おれもろへすもをしきこ
とちとそすれ

あるしろへ

花の香よふれてろへりしてふれもひろきぬふろら

ふつゝしきろふ
まと消息の末よ
これやとかいもよあふへきさゝふらんふりよしそて
も花の香そする
をとこふさくひゝへし　鈌文
昔をとこありけり女ゝりいきてゝさらひけるよきぬきぬ
の別をしみてよめりける
ゝへりふんいさとをいへとあやよしきさゝまくをし
き花の木のもと
昔をとこあるをんふよけさうして言よりけれといとつれ

ふゝりけれも
へをるへくみゆるものゝらやまさくらあまり水さゝ
き花いゝよせむ
むゝしをとこあるゝうれめよ物いひゝむしけるとゝ
うきくきのうきさるもふとみけれとも絲ふゝらひく
もゝとくそありける
むゝしをとこありけり友ふりけるふよゝし皆人のえゝて
よすといふふるをんふよあひていとよゝこはひてよめり
ける
ちそやふる神とよしらぬとひふれと千代もといのる

とよひふりけり

をとゝれをきゝて

人の名もさゝ名れさくぬとひふらを むすふのゝみも

うれしゝらまし

むゝしをとこおきておもひふしておもひおもひあまりて

よめりける

とれふゝらあやふまれけりまよひ入とひの山路のを

てをしらねも

ひとゝころつねふきものとゝりふゝらあやしく末を

ちきるふりけり

昔をとこ女とふさり舟よのりてとある橋のほとりまでい

きけり舟人をゝれひさうへよとて出てしをしゝへらさり

けれもほゝよひともふゝりけりゝさみよおもひあへりけ

れとしゝすゝよをちらひて物をさよえいをさりけりをと

こよめりける

きく人のおしとれもへを中くよそゝろとをさへいを

れをりけり

女何とゝとさへけんきこえす

昔をとこひとのむすめの十二三よおれるゝいとらうとけ

ふるをつくゝ見をりて

ひとりさつきしのいもぬの姫小松ゝぬてちとせの陰
も見えけり
昔女ありけりをとこのつれなかきをうらみて
ゝすからぬうきみのとゝをかけくとやおもふを人の
おもむきるらん
をとこうさをえよまきりけれもゝへーをかゝりけり
むゝーをとやよひむくり山吹の花よそへて女のもとよ
つゝむーける
あふことむゝさ岸よきくやまふきのいもておもふと
人むーらかん

昔をとこあつまよくだりける道よて大井河のそとりま
てきよけるよかゝ雨よ水ゝさまさりてとゝるへきやうも
あらすせんすへかくて日坂といふうまやよ日ひと日夜一
夜とゝまれりけりゝくてそのうまやのくゝつ女よもくり
かくあひけるよ次の日かこりをーみて
旅人よつみのとされー道のへのをみかへーもとかつ
ゝーきゝか
まさ
くさまくらひと夜ゝりねのやとうきへゝへり見らる
るあさほらけゝか

昔をとこあるをんなよけさうしてけれといひよるへきよ
しふくてやみけるよそのをんなふりそめのやまひおもり
てしよけりほとへてある人のもとよいきけるようとひめ
ともみさりよさりきよけりその中のひとりれいのをんな
よつゆもろりもさゝをすをとふさゝひ心うこきよけり
さてよめりける
昔見し月のろつらのさとふらてそれゝとみゆる花の
おもゝけ
まさ
くもとみてやまんとすれとあさふ〳〵心よろこる

花のおもかけ
女せちふるこゝろよめでゝやゝてあひよけり男いゝよう
れしゝりけむゝし
昔をんなふれろさよふりける男をうらみてふとやひさし
くとをぬといひけれを男とりあへす
ゆきゝよふひまとそふけれものゝふのうちの川橋中
をゝえねと
をんなふろへし
いさつらよまつ夜あけゆくねやの戸のひまとそ見ゆ
れとをぬ君ゝか

昔をとこあるをんなとよけさうして年ごろいひよりけれど
おやのゆるさゞりけれもあをんすへなくてはとへよけり
をんなも此男よ心ありけれもろさみよ心をつくしてけり
ろくてある日神まつりの物見のまきれよをしめて其をん
なよあひけりをとよよろとおひて
城よさよろべしといひしを志らたまのえかさき人をあ
ひ見つるかな

翻刻 博物新編 三冊
萬國輿地全圖 一帖
大日本沿海略圖 同
内科新説 三冊
西醫略論 四冊
婦嬰新説 二冊
全體新論 三冊

英吉利歩兵練法 貌里瓦埃及里尼部 二冊
戰地急構堡砦新論 毎帙二冊
新編砲家必携 近刻
青囊必須 十冊 近刻
柳園叢書 追〻出來
數學教授本 同
洋學指針 蘭学部 英学部 各一冊

江戸本町四丁目 上州屋摠七發兌

中外堂記